

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 三重野清顕

本論文は、ヘーゲル哲学にそくして、時間的諸規定を超越した永遠性の領域と、時間性によって規定された現実的な生起の領域がどのようにして同時に思考されうるにいたるのかを考察しようとするものである。そのためには、永遠な真理を論じる論理的思考と、現実の生成にかかわる時間論的思索とが調停されなければならないが、本論文はこの難問に、ギリシア哲学以来の伝統ならびにドイツ哲学の系譜を跡づけながら立ち向かう。

第一章では、実体と関係の問題をめぐるその哲学史的な背景が明らかにされる。アリストテレスのカテゴリー論と、その古代哲学およびキリスト教哲学における受容が迎られるとともに、カントにおける感性と悟性の峻別が、時間的差異の論理的な文脈からの追放の試みとして位置づけられる。第二章では、このカントの立場が、第一批判・「理想」論における規定可能性の問題を頂点としてさらに考察され、そのうえでマイモンならびにフィヒテにおける問題の展開が跡づけられる。第三章では、ヘーゲルに直接に先行するシェリングの時間論が問題とされる。シェリングは「超越論的過去」をめぐるその考察にあって過去そのものの超越性を確保しようとしたが、シェリングはさらにフィヒテ的な「自我」の生成史ばかりでなく、独特な歴史哲学をも形成することになった、とするのが氏の認定にほかならない。第四章ではまず、シェリングの対比において、ヘーゲルにおける過去の超越性の問題が確認される。ヘーゲルにあって、問題は一方では「因果性」に、他方では（因果性を内面化する）「想起」に関係してゆくことになる。第五章では、外面性と内面性とのこのような関係が、より具体的な場面で、初期ヘーゲルのキリスト教論の考察を介し捉えかえされる。共同体の創出において時間性がどのように機能してゆくのかの解明されてゆくわけである。第六章は、ヘーゲル哲学において時間性と超時間性の問題がどのように論理化されてゆくかを、主として『大論理学』の本質論を中心に考察しようとするものである。イエナ 1804/05 年草稿に、すでにその発想の萌芽が認められるように、ヘーゲル哲学の立脚する「無限性」とは「それ自身の他者」と規定されるものであって、成熟したヘーゲルの論理思想は、相互関係のうちにある他なるものを、本質の内在的な規定として把握することをつうじて、時間と時間を越えたものを調停しようとする試みなのである。

本論文は、永遠と時間との関係という問題系を、学史的研鑽の充分な蓄積と、ヘーゲルならびにドイツ観念論をめぐる先行研究の周到な配視とにもとづいて論じようとしたものである。なお未整理で未展開な部分を残しているとはいえ、本論文が着実に創意ある思考により以後の研究の礎を築こうとするものであることについては疑いを容れない。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。